

## 沖縄における方言札の出現に関する研究 —1911年度以前を中心に—

梶 村 光 郎\*

### A Study on the Emergence of Dialect Punishment Board in Okinawa —Focusing on the years before 1911—

KAJIMURA Mitsuro

#### 要 旨

沖縄の標準語教育史を特徴づける方言札の実態については、分からないことが多い。そこで、方言札の歴史において画期をなす1911年度という時期以前の、方言札の出現状況や実態を明らかにする。その上で、1895年度・1896年度頃に出現した最古の事例を取りあげ、出現の時期が通説よりも遡ることの意味などを考察する。

#### 要 約

小論は、沖縄県内の小学校教育のお手本と目される沖縄県師範学校附属小学校が方言札を導入した1911年度を沖縄の方言札の歴史における一つの画期と見なし、それ以前の方言札の事例を調査し、1900年代以前にも方言札が存在したことと、その事実が意味することを考察するものである。考察の対象となる事例が19あることと、方言札の最も古い事例は1903年であるという「通説」を覆す、最も古い事例が1895年度・1896年度頃のものであることを明らかにした。また、1911年度以前の方言札の実態を回想・証言・第一次史料を用いて眺めてみると、時期がまちまちであり、地域も沖縄全県にまたがっており、札の形状も様々であることが確認できた。罰の内容も方言札を手渡されるだけですむ場合と、札を首に掲げられる場合があり、それに加えて立たされたり、掃除当番をさせられたり、修身の点を下げられたりするなどの罰があることが確認された。さらに、方言札は、教師の目が届かない時間や場所で、取り締まりの係や児童・生徒同士によって監視され、札を手渡されたりなどするものであった。そうしたことが日常的に行われていたが、特別に「方言札の日」を設定して行われたりしている場合もあった。方言札の学校への導入については、生徒間の取り決めに基づく事例（県立一中）を除けば、学校・教員側が主体となって行った事例ばかりだった。罰との関係で言えば、方言を使用した場合、①方言札を手渡される罰、②方言札を首にかけられる罰、

\* 沖縄大学こども文化学科

③方言札とそれ以外の罰を課されること、④方言札をもち続けることに伴う制裁という形が見られた。一方、下級生がいじめを恐れ上級生に方言札を渡せないという事態も起こり、廃止された事例も見られた。その事実、方言札の教育方法や教具としての欠陥を示すものであった。また、沖縄県師範学校附属小学校の標準語教育実践の例から見ると、この学校では、方言札の使用だけでなく、普通語と対照させた方言集を用意したり、談話会を設けて言語の練習をさせたりすることなど、標準語を正しく使用させるための取り組みや工夫があった。このことは、方言札だけで標準語の教育・励行・普及が図られるとは考えられていなかったことを示している。

以上のことを踏まえ、方言札の出現の時期や出自などの問題を検討し、方言札の出現には、方言を使用させないで標準語を話させようという学校・教員の強い意志が関係していること。その意味で、どの時点でも方言札は出現する可能性があることを指摘した。

キーワード：沖縄 標準語 標準語教育 方言 方言札

## 1. はじめに

沖縄の標準語教育の歴史の上で注目されるのは、規範的な日本語（以下「標準語」という用語を使用する。）を教育・普及・励行するために、学校で方言を使用させないように用いられた罰札（以下、「方言札」という用語を使用する。）の存在である。

この方言札は、戦前においては奄美や秋田でも使用されていた。しかし、明治期から昭和戦後期まで長期間使用されていた事例は、沖縄以外にはない。奄美の例<sup>1</sup>は、大正期からであり、秋田の場合<sup>2</sup>は昭和戦前期においてである。そうしたことを踏まえて言えば、方言札は沖縄の標準語教育史を特徴づけるものである。

しかし、この方言札の実態については、まだ分からないことが多い。たとえば、方言札の出現の時期や使用されなくなった時期の解明などである。しかし、近年この方言札の実態に関する研究が進んできた。その代表的な例が、沖縄県内の各小学校の記念誌に掲載された方言札の体験者の回想や証言をもとにした近藤健一郎の研究<sup>3</sup>である。近藤の研究は、沖縄県内の地域を6分割し、それぞれの地域の各小学校に即して体験の期間を明治期から昭和戦後期まで、西暦で5年毎に区切って一覧表を作成し、体験の内容を分析したものである。この研究により、沖縄における方言札の実態が可視化され、それ以降の研究の指標となった。たとえば、そのことは、方言札の学校への導入の最も早い例が、北谷尋常小学校（1903年度）であることを指摘したこと<sup>4</sup>からも窺えよう。この事例の発見により、外間守善の唱えた1907（明治40）年頃という通説が覆えられた。

その後、この近藤の研究を踏まえて井谷泰彦は、1896（明治29）年に起きた「旧沖縄士族層が自らを『琉球・沖縄人』として自己主張した最後の事件である『公同会』事件」に着目し、この事件以降の「対日同化」を求めるアイデンティティへの転換により、標準語教育が求められて1903年に方言札が出現したという仮説を唱えている<sup>5</sup>。また梶村光郎も、1901年に本部尋常小に入学した山城宗雄の回想を踏まえて、「どこまで遡れるのか不明であるが、明治30

年代においては各学校に導入されていたということになるであろう」と仮説を述べている<sup>6</sup>。そしてこの「どこまで遡れるのか不明である」という課題に素早く近藤は対応し、方言札が存在し得ない時期を示すことで、方言札が存在した時期を確定しようと発想の転換を行う。そして実際に、①回想に基づく方言札の存在の確認と、②同時代史料に基づく方言札の不存在、という二つの視点から考察を行い、次のような結論を得ている<sup>7</sup>。

方言札の出現時期は一九〇〇年代前半であるということ……。それは、一九〇〇年代前半に方言札を体験したという回想記録が得られたのみならず、当時の授業記録によれば一八九〇年代後半までは標準語と沖縄語とを対訳で用いていることから、方言札は出現することはありえなかったと考えられることによるものである。

この近藤の結論は、回想で確認できた方言札の出現の時期と、師範学校において標準語習得と沖縄語禁止を一体のものとして実施する教育が具体化したこと、及びその影響が各小学校に及んだことを想定して組立てられている。しかし、この仮説は、1900年代以前に方言札が出現しなかったという場合には有効であるかもしれないが、そうでなければ成立しない。なぜなら、仮説の前提が、1900年代以前に方言札が存在しないことと、標準語と沖縄語の対訳が用いられている時期には沖縄語の使用が許容されているから方言札が存在しない、と考えているからである。その結果、近藤の仮説の検証に関わって、再度「どこまで遡れるのか不明である」という課題に再び立ち帰らざるを得なくなっている。

そこで小論では、沖縄県内の各学校における方言札の導入について、多大な影響を与える沖縄県師範学校附属小学校の方言札の導入の時期である1911年度を一つの画期と見なし、それ以前の方言札の事例を調査し、1900年代以前に方言札が存在したかどうかと、その時期までの方言札の実態を明らかにする。そして後述するが、方言札が1900年代以前に出現したことの意味を考察することにする。

## 2. 1911年度以前の方言札の出現の状況

まず始めに、近藤の調査結果を参考に、小論が対象とする時期に出現したと思われる13の事例をまず検討する。

それは、登野城小（1910年代前半）、狩俣小（1910年代前半）、玉城小（1900年代後半）、南風原小（1900年代後半）、北谷小（1900年代前半）、古堅小（1910年代前半）、山田小（1900年代後半）、名護小（1910年代前半）、瀬喜田小（1910年代前半）、国頭尋常高等小（1900年代後半）、国頭尋常高等小（1910年代前半）、羽地小（1900年代前半）、第二豊見城小（1900年代後半）における事例である。

まず、登野城小の場合は、竹原孫恭の次のような発言に基づいている<sup>8</sup>。

方言札を首からかけていることは大変不名誉なことでしたので意識して、無口になりがちでした。早く他人に渡すことを考えました。そして他人の足を踏んでアガー（いたい）といわせ、あなたは方言を言ったからといって方言札を渡すということもよくやったものです。

近藤は、この発言を引用した上で、「座談会 登野城校百年によせて」（『登野城小学校百年の歩み』、1981年）の出席者の「竹原孫恭（明39）」という記載を「竹原孫恭（1906年入学）」と理解し、彼が方言札を体験した時期を「1910年代前半」と位置付けている<sup>9</sup>。しかし、明治39（1906）年は、竹原の出生年である。そこから推測すれば、大正期での体験となる。だから、この事例は、1911年以前ものではないことになる。

狩俣小の事例は、同校の『百年誌』（1988年）所収の「（座談会・六）大神出身者は語る」に出席した、伊佐カナシ（明治41年入学～大正3年卒業）が、司会の「方言札というものがありましたか、皆さんの場合はどうでしたか。」という問いに対して「ありましたよ。」と答えたことに基づくものである。それを受けて司会が「ホー。明治の頃からあったんですね。」と反応したことも踏まえると、1908（明治41）年から1912（明治45／大正元）年までの間に体験したと考えられる。もちろん1912年度における体験だとすれば、小論で設定した時期区分に該当しないが、そのことを確定できないので、この事例は対象に含めておくことにする。

玉城小の事例は、安次富信雄（明治45年高等科2年卒）の「方言札はありましたよ。次の方言する人を見つけるまでは持ち歩いていました。札は持っていないでも罰は与えなかったのです。」という発言に基づいている<sup>10</sup>。1912年高等科2年卒を手がかりにすれば、「1904年入学」であり、安次富は玉城尋常小から同尋常高等小に在籍していた「1904年度～1911年度」頃のどこかで体験したと考えられる。

南風原小の事例は、大城ウト（明治30年生）の「小学校までは四年生頃から方言フダがあり、男の子達に追いかけて、ころんだ時アイターとかアガーヨーとわざと言わす為、追いかけるのが大変こわく、逃げまわりました。」という証言に基づいている<sup>11</sup>。大城は、この発言の前半で「私は、南風原小学校を四年生まで出て卒業しました。……同年生でも年齢がまちまちでした。八歳、九歳、七歳と、家の都合で入学の時期に差がありました。」と述べており、そこから推測すると、体験の時期は「1904年度～1907年度」となる。近藤は、体験時期について「何年生の時のことと明確に回想している場合を除き、小学校在学の半ばにあたる小学校中学年の年代に区分した。」として「1900年代後半」と分類している<sup>12</sup>。

北谷小の事例は、花城可勢（明治34年入学）の以下の発言に基づくものである<sup>13</sup>。

簡単なお話大会があった。それから三年の時から標準語励行、それまでは全部方言ばかりだったからー。そのころ、チブルサーエーなんかしていたら、すぐ「イヤーヤ、マキタン（おまえの負け）」なって言おうものなら、すぐ手札を渡された。一回、同級生

にそれをやられたから、自分は渡さなかったのに何でお前はそんなことをするかと言っ  
てぶんなぐってやったら、逆に今度は私が「お前の方が悪い」と伊礼のタンメーにげん  
こつを食らわされた。タンメーは高等科生だったからー。

（玉城清松の「花城のおじいさんは先ほど、方言札の話をしておられましたが、それ  
には何か罰がありましたか。」という問いに対して）五日間、それを持ったままではい  
ると「あなたは心がけがよくない」といって教室の踏み台の前に一時間ばかり立たされた。

花城の発言から、体験した時期が「1903（明治36）年度」であることが分かる。ところが、  
近藤は、前掲の「近代沖縄における方言札の出現」という論文で「私が一九〇三年頃の回想  
を紹介した」と訂正した<sup>14</sup>が、それ以前は、その時期について次のように記述していた<sup>15</sup>。

花城の回想によれば、彼は四年間小学校に通ったとのことなので、1904年頃のことと  
考えられる。これまでの研究によれば、方言札は1907年頃から登場したとされており、  
また私自身もそれに依拠した記述をしてきた。このことは今後、訂正されなければなら  
ないであろう。

この文言からも窺えるように、傍線の部分の「三年の時から標準語励行……そのころ」と  
いう文言については言及されていない。確認されているのは、花城の入学年と卒業年である。  
確認できるのは、1901年に入学して、四年間在籍して卒業したということである。そこで、  
体験時期が明確になっていない場合に近藤が用いる「小学校中学年の年代に区分」という  
原則が適用されて「1904年頃」となったのだと思われる。このことは、おそらく傍線の部  
分を省略して引用したことから生じた誤りだったのであろう。

古堅小の事例は、「松田清幸（明治35年生）」の次のような発言に基づいている<sup>16</sup>。

当時まで、学校で方言を話すと、先生が作った方言札を首にかけられた。最初は級長  
に方言札をあずけて、方言を使った者の首にかけた。方言札をかけられた者は、次に方  
言を使う者がいないか探したり、方言を使うようしむけた。ひとクラスに二つほどの方  
言札が置かれていた。

この発言は、古堅学校の校長とその家族のことを思い出して語った後に続けられたものであ  
り、「当時まで」という言葉からも推測できるように、古堅学校（本校）在籍の時代（1912年  
度頃～1914年度頃）の体験を語ったものと解される。よって小論の対象の時期には該当しない。

山田小の事例は、上間源正（明治32年7月生）の次の回想（談話）に基づいている<sup>17</sup>。

言葉の面ではたいへん困りました。標準語（大和口）使えるものはイクタイで、私の時代から標準語励行で方言を使ったら方言札と言うのがありまして首にさげさせられました。

体験した時期は、出生年からの推測になるが、「1906年度頃～19011年度頃」と思われる。

名護小の事例は、宮城桃郁（大正5年卒）の「方言札や中食の弁当に芋を持参したことなど、今日では考えられないことである。」という回想に基づくものである<sup>18</sup>。宮城は、「私は明治四十四年（一九一一年）、尋常科一学年に入学した。」とも記述しているので、体験した時期は「1911年度～1915年度」のどこかの時期となる。小論の対象時期と一部重なる事例なのでここに一応含めておく。

瀬喜田小の事例は、大城蔵栄（明治30年生）の記録にある「④方言札の発行と標準語励行」に関する次のような記述に基づくものである<sup>19</sup>。

岸本校長就任当時の生徒の言葉の乱れは、これ又表現できない程の有様で、その改善には長期を要する事を覚悟し、指導には東江出身の比嘉廉次先生が主に当たった。方言取り締り係員は、十五分間の休憩時間に赤いタスキを肩にかけ、運動場を隈なく巡り、その取締まりを厳重にし、違反者には容赦なく方言札を渡した。ところがこの方言札は、生徒から生徒に次々渡っていくのだが、下級生はいじめを怖れて上級生に渡すことができず、しまいには、この方言札の発行は廃止になった。

体験の時期は、岸本吉二校長が1907年4月に着任してから大城蔵栄が6年生だった1910（明治43）年度までの間、つまり「1907年度～1910年度」の時期と考えられる。回想にはいつまで方言札が使用されたか記述されていないが、学校の判断で方言札が導入されたことと下級生が上級生に方言札を渡せないために廃止になったことが注目される。

国頭尋常高等小の最初の事例は、多和田眞祥（明治44年卒業）の次の回想に基づくものである<sup>20</sup>。

或る朝礼の日に少し遅れて間に合わず、普通語使用の日とあって私は何も知らずに教室に入る時、前の人に「ヘークアッケー」と方言を言ったものだ。……「ア、君は方言使ったから札渡すよ」と云われて吃驚した。私はおくれて知らなかったから許して呉れと謝罪して赦されたものだ。

これは、1903（明治36）年春に国頭尋常高等小に入学した多和田が4年生の時のことであり、体験時期は1906年度ということになる。方言札の日の設定と、札を手渡すかどうかが判断する者の裁量に委ねられていたことを示す事例として注目される。



もう一つの事例は、「栄光百年を語る（座談会）」に出席した、国頭尋常高等小の宮城カナ（大正6年高等科卒）の「（方言札が）ありました。」という発言に基づくものである<sup>21</sup>。この発言は、司会の「明治の皆さんもありましたか。」に答えたものであり、体験した時期は「1909年度～1912年度」頃と考えられる。

羽地小の事例は、玉井亀次郎の次のような回想に基づいている<sup>22</sup>。

方言取締りの励行、其の頃学校の先生達は、方言が学校の内外を問わず行われて居ることに頭を悩まし、生徒に其の取締りの方法に就いて、妙案を募集したところ、高等科生の中から、取締札の施行が飛び出して来た。沖縄には古くから、砂糖キビの盗食や分ケツ茎の盗難に、取締札の施行が一般化して居たので、之を学校に施行する事は、至って簡単であった。然しキビの取締札は一日金一銭でよかったが、方言札は掃除当番をさせられる事に定まったので、之が何日も続いた時は大変な仕事である。

この回想は、「シービー学校を語る」という題名の中で語られていたものであるが、1902（明治35）年に新築移転した時期の羽地尋常高等小のことを「シービー学校」と呼んだことが、『羽地小学校創立百周年記念誌』（1983年）の「百年のあゆみ」に掲載されている。それに基づけば、体験時期は1902年度頃ということになる。この事例は、北谷尋常小学校の1903（明治36）年度の体験の事例よりも一年古い体験と言えるものであり、1903年度以前の事例として注目されてよい。

第二豊見城小の事例は、當間邦彦の次のような回想に基づいている<sup>23</sup>。

字豊見城に学校があったころには、標準語励行ということで方言を使った者に対しては、週番が廻ってきてつかまえて方言札をかけた。休み時間はほとんど方言であった。

當間は、1904年に豊見城尋常小（1906年豊見城尋常高等小に改称）に入学し、1908年度から座安地区に分離独立した第二豊見城尋常小に5年次から転校し、1909年度に卒業している。転校の時期から体験の時期を計算すると、「字豊見城に学校があったころ」というのは、豊見城にあった豊見城尋常小（1907年度豊見城尋常高等小に改称）時代の「1904年度～1907年度」となる。その時期が、當間の方言札体験の時期ということになる。

以上の考察から、登野城小学校と古堅小の2校を除く11校が、小論の考察対象となる事例ということになる。それでは、これら11校以外に1911年度以前に方言札が学校に導入された事例はないのだろうか。これまでの調査研究からすぐに指摘できるのは、次の四つの事例である。

それは、県立第一中学（現首里高校）の事例（仲井間宗一の証言）と、本部尋常高等小の事例（山城宗雄の回想）、中城尋常小の事例（安里千代子の談話）、沖縄県師範学校附属小の事例である。

県立一中の事例は、仲井間宗一（1911年卒）の次のような発言に基づくものである<sup>24</sup>。

方言札は大正時代にできたように言われたが、実はあの方言札というのは明治のボク達のころからあった。しかし標準語の励行は、どんなに制札があってもできなかった。当時は、方言をなくし、すべての国民を公民化させようというのがねらいのようだった。

この発言に基づき、外間守善は方言札の出現の時期を「明治四〇年ごろ」と推定し、最古の事例と位置づけた<sup>25</sup>が、仲井間が卒業したのは1911年（明治44）年3月であり、その時期を起点とすれば、「1906（明治39）年度～1910年度」の時期に方言札を体験したものと考えられる。それ故、「明治四〇年ごろ」に方言札が出現した可能性は否定できないが、その時期でない場合もあり得ることを指摘しておきたい。

本部尋常高等小の事例は、1901年度に同小に入学し、尋常科4年を卒業後高等科に進んだ、山城宗雄の次のような回想に基づいている<sup>26</sup>。

標準語励行の問題は三十年も前、私共が小学校に通うてゐた頃から、随分矢釜しくいはれたものだつた。……罰則まで設けて、教室の掃除當番にしたり、大きな札を渡されたり、時には修身の点から引かれたりしたものである。それが方々の学校で行はれてゐる様であつた。

この回想からは、体験時期を確定することはできない。だから、確認できる時期として、山城が1901年4月に入学した時期から高等科を卒業したと思われる1907年3月までの時期、つまり「1901年度～1906年度」の時期に、方言札の体験をしたと考えておく必要があるだろう。場合によっては、1903年度以前の時期ということも考えられる。修身の点への影響は、方言札に付随する制裁として注目される。

中城尋常小の事例は、安里千代子（明治31年9月生）の「嫌いだったのは『方言札』で、次の人に渡すために追いかけていき、方言を使わせようとした。」という談話に基づくものである<sup>27</sup>。数え年8才で中城尋常小に入学し、6年間通って卒業したということから、方言札体験は「1905年度～1910年度」頃と考えられる。

師範学校附属小の事例は、1911年12月に発行された『沖縄教育』第68号の「教育施設一覧」という彙報記事の「五、普通語奨励方法」に関わる箇所のように紹介されているものに基づいている。

四、休憩時間中尋常科第六学年以上の児童に當番に方言取締掛を置き児童にして方言を使用せるものには「普通語」と記入せる厚紙製の札を渡さしむ

師範学校附属小では、いつ頃から方言札が導入されたのかは不明であるが、1911年度に導入されていたことだけは、この彙報の記事が掲載された『沖縄教育』第68号の発行の期日か



ら窺える。

これら四つの事例を加えると、1911年度以前の方言札の事例は、15となる。次に、新たに確認できた、四つの事例も紹介しておこう。

第一は、1911年9月22日に沖縄県師範学校で開催された、中等学校国語科教員研究会の協議のなかで紹介された事例である<sup>28</sup>。

多くは談話会、級会、学友会等を設けて特に練習せるが其他生徒間の約束によりて方言使用のものは罰札を渡し、或は生徒の誤り易き普通語を集めて特別に之を教授し或は運動場に於て特に注意監督する等実施の状況を話し合ひたり尚第二中学は實行を重ねしむ點より訓練中に加えりと云ふ

この事例は、方言札が生徒間の約束により出現したことを示す事例であり、教員や学校当局の発案によるものでない点が注目される。方言札を導入した学校がどこかはこの記事からは断定できない。しかし、上述の仲井間の証言や彼が体験したと考えられる時期、及び神山政良のいう生徒自治の伝統<sup>29</sup>を考慮すると、県立一中ではないかと推測される。

学生の組織する学友会があって……会の目的は「校風の振起、会員相互の親睦、氣質の鍛錬、知識の交換、言語の練習」といったものであった。……生徒間に別に規約があって「校内禁煙、校内の方言禁止、登校に際し必ず制服制帽着用、頭髮の五分刈」などを励行し、その監督は上級生にあったので、上級生は随分怖がられたものだった。

しかし、この推測が妥当だとしても、仲井間の体験した方言札が、神山のいう方言禁止のことを述べているのかは不明である。

第二の事例は、喜舎場尋常小に1900（明治33）年4月に入学した、宮城盛輝の回想に基づくものである。宮城は、「はだしに方言時代の小学一年生」の文脈のなかで「当時は家でも学校でも方言だった。学校では普通語励行のため違反者には方言札をかけさせたものである。」と述べている<sup>30</sup>。この宮城の事例は、上記の文脈を踏まえると、1900年度の体験ということになり、北谷尋常小の事例よりも遡る注目される事例である。

第三の事例は、金武尋常小嘉芸分校に1895（明治28）年度に入学し尋常科4年で卒業した、仲間平助の回想に基づくものである<sup>31</sup>。

（躰指導は厳しくて……梶村）低学年当時はよく泣いたものでした。姿勢を正しくしたり、普通の学習のよいこともみな成績に入っていました。方言を使う生徒には方言札というものがあってその方言札をわたします。その札をとった生徒は罰として掃除をさせていました。

これは、「低学年当時」のことを述べている文脈で回想されたものであり、1895年度か翌年の1896年度において体験された事例と考えられる。この事例が、現在確認できる最古の事例となるだろう。

第四の事例は、石原昌淳（美東尋常小に1906年度～1911年度在籍）の場合である。彼は「方言札は小学校の時から盛んであったが徹底しなかった。お互い同士になると方言だった。」と回想している<sup>32</sup>。

以上の四つを加えると、現段階における1911年度以前に出現した方言札の事例は、19となる。これら19の事例が小論の考察の対象となる。

### 3. 1911年度以前に出現した方言札の実態

それでは、これらの19の事例から、1911年度以前に出現した方言札の実態を探ってみよう。

まず確認されるのは、近藤や井谷も指摘している点だが、沖縄県内の各地域の学校で方言札が用いられていたということである。ただし、今回八重山地域で1911年度以前の事例が確認されなかった。しかし、そのことから、1911年度以前に八重山で方言札が使用されていなかったとは直ちには言えない。偶々体験した事例を確認できなかっただけかもしれないという可能性があるからである。しかし、1911年度以前において八重山では、方言札を確認できなかったことは事実である。

次に、方言札の出現の時期について見ると、1903年度以前の事例が、可能性を含めると4例存在した。

古い事例からならべると、金武尋常小嘉芸分校（1895年度か1896年度頃）、中城尋常小喜舎場分校（1900年度頃）、羽地尋常高等小（1902年度）、本部尋常高等小（1901年度～1906年度。ただし、どの時期か不明）、となる。現在のところ、金武尋常小嘉芸分校（1895年度か1896年度頃）の事例が最も古いものであり、方言札が最初に出現した時期は、1895年度か1896年度頃ということになる。このことにより、通説化している1903年発生説は、方言札の発生は1895年度か1896年度頃であると訂正されねばならないだろう。

方言札の学校への導入については、生徒間の取り決めに基づく例（県立一中）を除けば、学校・教員側が主体となって行った事例ばかりだった。羽地尋常高等小の場合にしても、方言取締り方法を教員が募集し、高等科生が取締札の施行を提案したというのが実状であった。つまり、元々は教員側から仕掛けた話だったのである。と同時に、この事例は、方言札のルールが共同体で用いられてきた制札法であることを推測させるものとして貴重な証言である。

方言札と罰の関係については、学校毎に対応が異なっている。たとえば、玉城尋常高等小の場合、方言札を手渡されるという罰以外に罰はなかった。しかし、北谷尋常高等小（一時間立たされた）、羽地尋常高等小（玉井の事例では、掃除当番）、本部尋常高等小（教室の掃除当番）、金武小嘉芸分校（掃除当番）などでは、方言札の手渡し（乃至は首にかける）以外の罰も存在していた。罰の内容の違いや方言札の導入や廃止の時期の違いを見ると、法規

等によって全県一律に導入されたのではないことは明らかである。地域の制札制の中身が、それぞれ異なるのと同様、各学校の方言札も形状（厚紙や木札）や罰の中身が異なっている。たとえば、「大きな札」（本部尋常高等小・山城宗男）、「『普通語』と記入せる厚紙製の札」（附属小）、「方言札」（木札と思われる）という具体的な言葉が、それぞれ形状や名称が異なっていることを示している。

また、方言札の実施に関わる点では、毎日行われる場合と、特別に「方言札の日」が設けられて行われる場合があった。方言札の教育的効果を考えた工夫として注目されるものである。と同時に、方言札が徹底しなかったことや、下級生がいじめを怖れて方言札を渡せないという想定外のことが起こり、方言札が廃止された事例もあった。この二つの事例は、方言札を教育方法や教具として捉えた場合、問題性のある不十分なものであったということを示している。そしてこれらの事実、1911年度以前の方言札の発生の時期から認識されていたことを示すものであり、1912年度以降の方言札の実施の際考慮されていたのかどうか、検討されなければならないだろう。

それでは、次に児童生徒の方言札に対する受け止め方はどうであったか見てみよう。

回想や証言などから窺えることは、方言札を手渡されるだけですむ場合と、札を首に掲げられる場合があり、それに加えて立たされたり、掃除当番をさせられたり、修身の点を下げられたりするなどの罰も覚悟しなければならないと受け止められていたことが確認された。そのような事情からだと思われるが、方言札を受け取った児童は、方言札から解放されようと、次の方言使用者を早く見つけ出そうと必死になって追いかけ回したり、方言の使用を指摘した人間に許しを乞い方言札の罪から逃れようとした例が見られるのである。いずれにせよ、1911年度以前においては、方言札は恥と罰を与える象徴としての意味があり、児童らに緊張感を与える存在であったと言えるだろう。

また方言札は「普通語使用の日」に限定されて行われる場合と、特に日にちを限定されない場合があることも確認できた。

次に、標準語教育実践のなかで方言札はどのような役割を果たしたのだろうか。師範学校附属小の普通語奨励方法を手がかりにして確認してみよう<sup>33</sup>。

## 五、普通語奨励方法

- 一、児童入学の當初二週間は止むを得ず方言を交え教授するを許すも三週間目より、萬止むを得ざる外は方言を用ひしめず
- 二、毎週一回談話会を開き普通語奨励と共に之を練熟せしめんことを期す
- 三、遠足又は運動会等の際は殊に方言取締を厳にせり
- 四、休憩時間中尋常科第六学年以上の児童に當番に方言取締掛を置き児童にして方言を使用せるものには「普通語」と記入せる厚紙製の札を渡ししむ
- 五、各級毎に方言を使用せる児童に對して相當の制裁を加えしむ

#### 六、方言集を備へて方言を蒐集し之を普通語と対照し教生に筆寫せしめ方言矯正の資に供せしむ

この第四項目目を見ると、6年生以上の生徒を「方言取締掛」に任命して、「休憩時間中」に児童が方言を使用しないように監視させ、方言を使用した児童に方言札を手渡すようにしていることが窺える。「休憩時間中」という文言に着目すると、教員の監視が行き届かない時間や場が想定される。その意味で言えば、方言札は、教員の監視が行き届かない時間や場で、児童が方言を使用するのを禁じるために導入された制裁方法の一つということになるだろう。また、第三項目目の遠足や運動会等の場も、「方言取締を厳にせり」ということで、教員による厳重な指導が行われている。その際、方言札による制裁の可能性も考えられるが、方言札が教員の監視が行き届かない時間や場において使用されるものであるならば、遠足や運動会の場においては教師の目が届くので使用されなかったことも考えられる。

また、第五項目目と方言札の関わりから言えば、罰自体は方言の使用に対してなされるものであり、方言札それ自身から殆ど場合は派生してはいない。そう考えれば、玉城小の事例のように、方言札を手渡されただけで特に罰がなかったことも理解できる。言い換えれば、方言を使用したことに対する制裁には、方言札を手渡すだけの罰、それを首にかけさせて恥をかかせる罰、さらに方言を使用したことに対する追加の罰としての掃除当番などがあったということである。そして実際には、上記の複数の罰を課す場合があったと考えられる。

それ以外の項目に関して言えば、基本は方言を使用させないで標準語を覚えさせて使用させることにあることを具体化するものである。たとえば、原則として教授語を標準語とすることは、教員がお手本を示すことであり、同時に標準語に慣れさせるという意味がある。また、普通語と対照させた方言集を用意したり、談話会のような言語の練習をさせたりすることは、標準語を正しく使用させるための工夫である。このような工夫が制裁と合わせて実践されていたのが、1911年度以前の標準語の教育・普及・励行の実態であったと言える。

#### 4. 1911年度以前の方言札の事例が意味するもの

1911年度以前の方言札の事例は、現在確認できたものだけで19であった。そのうち、方言札が最初に出現したとされていた1903年以前に存在する事例が、可能性を含めて4例あった。この事実は、今後さらに古い方言札の出現の可能性を示唆するものである。と同時に、1895（明治28）年度か1896年度頃に金武尋常小嘉芸分校に出現した事例は、現在のところ、1903年発生説を覆す最古の事例である。今後は、新しい事例が発見されない限り、この事例が、方言札出現の最古の事例となるであろう。そしてそのことを踏まえて言えば、「1. はじめに」で紹介した、近藤の仮説は成り立たなくなる。なぜなら、近藤の仮説は次のような根拠の上に組み立てられていたからである<sup>34</sup>。

方言札の出現時期は一九〇〇年代前半であるということ……。それは、一九〇〇年代前半に方言札を体験したという回想記録が得られたのみならず、当時の授業記録によれば一八九〇年代後半までは標準語と沖縄語とを対訳で用いていることから、方言札は出現することはありえなかったと考えられることによるものである。

つまり、金武尋常小嘉芸分校の事例により、近藤の仮説の根拠は崩れたのである。

次に、井谷の「対日同化」への転換により、方言札が出現したという説にも言及しておく。

19の事例を見る限り、この井谷が言う「対日同化」を求めるアイデンティティへの転換により、民衆が標準語教育を求めていたという事実も窺えなかった。それは、井谷が参照している、「沖縄県民の世代別言語生活」調査（東江平之代表『沖縄における言語生活及び言語能力に関する比較・測定的研究』、琉球大学、1983年）によっても言えるだろう。1908（明治41）年以前の民衆は、「方言優位」の言語生活を送っており、その事実から標準語教育を求めていたとは考えられないからである。また、井谷の以下の仮説<sup>35</sup>にも疑問がある。

ある時点でその村内法の罰札の対象に「言語の矯正」という一項目が加わった。「方言札」の成立である。誰がその項目を加えたのか、まだ断定はできないが、間切村内法の執行者であり、「国語教育」を中心とした夜学会などを開催していた村の二才揃＝青年会の関与が想定できる。その罰札と制裁方法は、村の青年自身の手により、または速成に養成された村出身の教員たちの手によって、学校社会にそのまま持ち込まれ準用されることになった。

この井谷の仮説を補強する事例として、読谷村の「与那嶺正吉＜仮名＞」（昭和17年頃の回想。1932年生まれ。）の「うちの学校では方言札が使われていなかった。その代わりに村の青年団によって使われており、方言を使うと札を渡され罰金を払われた。」という証言<sup>36</sup>と、国頭尋常高等小の「各部落の生徒自治会が方言札というものを発行していた。……私は高等二年生になった。……部落の自治会長であった私は、こつけないことを考えついた。小さな方言札をもって、友達同志の失敗を探して歩くようなやり方はどうもいけない。ひとつ誰にもすぐ気づくでつかい札をつくろうと思いついたのである。」という、金城久重（1939年卒）の回想<sup>37</sup>がある。

しかし、これらの証言や回想は、昭和期の方言札に関するものであり、1911年度以前の明治期の方言札に関わるものではない。だから、この二つの事例を主要な根拠にして、上記の仮説を主張するのならば、方言札の変化の歴史を無視した妥当性のないものだと思われるだろう。また、19の事例のなかには、直接村落から学校に持ち込まれたことを示す方言札の事例はない。あるのは、村共同体に近代以降も行われていた制札法にならって学校に導入された方言札の事例だけである。つまり、1911年度以前においては、方言札の出自はそれぞれ



の学校にあるということになるのである。

最後に、1895（明治28）年度か1896年度に方言札がなぜ出現したのかという課題が残る。これについては、嘉芸小に史料が残されていない。だから、1893年7月の沖縄県令第27号の「小学校教則大綱」の制定や、『沖縄県用尋常小学読本』が1896年から1898年にかけて発行され、その後廃止されたこと、教員の標準語教育に関する意識、師範学校及び同附属小学校の動向などを分析し、そこから考察することが必要なのではないだろうか。そして、近藤の仮説が成立しなかった理由と関わらせて言えば、方言を使用させないで標準語を話させようという強い意志を教員が持った場合、どの時点でも方言札は出現するという点だけは言えそうである。その場合問題なのは、方言札を導入するにいたった各学校・各教員の意志や意識の背景に何があったのかということである。この点の追究は、今後の課題である。

## 5. 終わりに

1911年度以前に出現した19の方言札の事例を検討した結果、1903年度以前に存在する事例が、可能性を含めて4例出てきた。そのうちで一番古い事例は、金武尋常小嘉芸分校に出現した事例である。これで方言札の発生年は1895（明治28）年度か1896年度まで遡ることとなった。また、1911年度以前の方言札の実態から分かったことは、教員の監視が行き届かない時間や場で児童に方言を使用させないために用いた制裁方法の一つだったということである。そして、罰との関係で言えば、方言を使用した場合、①方言札を手渡される罰、②方言札を首にかけられる罰、③方言札とそれ以外の罰を課されること、④方言札をもち続けることに伴う制裁という形が見られた。また嘉芸分校の例は、従来の方言札の出現に関する仮説の見直しを求めるものであった。

方言札の効果を教育方法とか教具とかいう面から見ると、徹底さに欠けたり、いじめを怖れて方言札を手渡せないために廃止になったりするなどの事例もあり、問題性を有していたと言える。と同時に、それらのことが、1911年度以前の方言札の発生の時期から確認されていたことは、その年度以降の方言札の実施の際に考慮されるべき内容だと言えよう。

方言札の出現には、方言を使用させないで標準語を話させようという学校や教員の強い意志が関係している。その意味で、法規や同調圧力の有無以外に、どの時点でも方言札は出現する可能性があり、1900年度以前の方言札の出現の問題も、その視点から考慮する必要が出てきたと言えるだろう。なお、本研究は宇流麻学術研究助成金の支援等をうけて遂行した。感謝したい。

## 注

<sup>1</sup> 西村浩子「奄美諸島における昭和期の『標準語教育』」（『松山東雲女子大学人文学部紀要』第6巻、1988年）を参照。

<sup>2</sup> 石田磨柱『挿絵で見る昭和初期のおきなわ』、自費出版、1988年、P30。本人に確認したら伝聞で



あるとのことであった。

3. 近藤健一郎「近代沖縄における方言札（1～7）」、『愛知県立大学文学部論集（児童教育学科編）』第47号～第53号、1998年～2004年。
4. 近藤「近代沖縄における方言札（5）」、『愛知県立大学文学部論集（児童教育学科編）』第51号、2002年、P61。この論文では1904年頃としている。
5. 井谷泰彦『沖縄の方言札』、ポーターイング社、2006年、P63～64。
6. 梶村光郎「沖縄の標準語教育史」、『沖縄県の国語教育史に関する実証的研究』（平成13年度～15年度科研報告書。代表梶村）、2004年、P40。
7. 近藤「近代沖縄における方言札の出現」、『方言札』、社会評論社、2008年、P27～46。
8. 竹原孫恭「座談会 登野城校百年によせて」、『登野城小学校 百年の歩み』、1981年、P220。
9. 近藤「近代沖縄における方言札（1）」、『愛知県立大学文学部論集（児童教育学科編）』第47号、1998年、P35。
10. 安次富信雄「座談会 明治・大正時代の卒業生」、『玉城小学校100周年記念誌』1983年、P157。
11. 大城ウト「長生きしてよかった」、『南風原小学校百十周年記念誌』、P153～154。
12. 近藤「近代沖縄における方言札（1）」、前掲、P34～35。
13. 花城可勢「座談会 北谷小の百年」、『北谷小学校創立百周年記念誌』1984年、P310～311。
14. 近藤「近代沖縄における方言札の出現」、前掲書、P27。
15. 近藤「近代沖縄における方言札（5）」、前掲、第51号、P61。
16. 松田清幸「82年前のこと」、『古堅小学校創立100周年記念誌』2003年、P464～465。
17. 上間源正「私も山田校の卒業生」、『山田小学校百周年記念誌』1988年、P195。
18. 宮城桃郁「母校のおもい出」、『名護小学校創立百周年記念誌』1983年、P422～423。
19. 大城蔵栄「座談会 瀬喜田校を語る」、『瀬喜田小学校創立百周年記念誌』1989年、P269～270。
20. 多和田眞祥「わが学窓時代」、『辺土名小学校創立100周年記念誌』1983年、P447～448。
21. 宮城カナ「栄光百年を語る 座談会」、『辺土名小学校創立100周年記念誌』、P361～371。
22. 玉井亀次郎「シービー学校を語る」、『羽地小学校創立100周年記念誌』、1983年、P102。
23. 當間邦彦「本校第一期卒業生」、『座安小学校創立80周年記念誌』、1990年、P85。
24. 仲井間宗一「『驚天動地』の今昔を語る（下）」、『琉球新報』1960年12月9日付。
25. 外間守善『沖縄の言語史』、法政大学出版局、1982年版、P81。
26. 山城宗雄「標準語励行の問題」、『沖縄教育』第273号、1939年5月、P35。
27. 安里千代子「談話」、『荻道字誌』、北中城村荻道自治会、2010年、P196。
28. 無署名「中等学校国語科教員研究会記事」、『沖縄教育』第67号、1911年4月、P37。
29. 神山政良「中学時代の頃」、『養秀百年』、養秀同窓会、1980年、P267。
30. 宮城盛輝「小学校時代のこと」『創立七十三周年記念誌』、北中城小学校、1973年、P38～39。
31. 仲間平助「想い出」、『創立75周年記念誌』、嘉芸小学校、1965年、P45。
32. 石原昌淳「古老からの聞き取り」、『沖縄市学校教育百年誌』、沖縄市教育委員会、1990年、P240。

- <sup>33.</sup> 沖縄県師範学校附属小学校「教育施設一覧」、『沖縄教育』第68号、1911年12月、P43～44。
- <sup>34.</sup> 近藤「近代沖縄における方言札の出現」、前掲、P46。
- <sup>35～36.</sup> 井谷泰彦『沖縄の方言札』、ボーダーイング社、2006年、P188～189。
- <sup>37.</sup> 井谷、同上、P38。